

安積の「輪」、巡り来る季節

校長 久保田範夫

平成二十五年（度）は、生徒諸君にとつてどのような年だったのだろうか。

私自身のことと恐縮だが、四年間続いた県の教育行政の仕事から、久し振りに学校に戻ったのが昨年の四月。安積は、昭和六十一年度から平成八年度までの十一年間の勤務以来、実に十七年ぶりで、母校の変貌ぶりに驚かされたが、それから、あつという間に九か月が過ぎていった。師走の十二日、日本漢字能力検定協会（京都市）は、清水寺の森貫主のパフォーマンスにより、平成二十五年を最もよく表すとする漢字「輪（わ）」を発表した。そこに込められた思いの主なものとして二〇二〇年の東京五輪招致の成功、台風等自然災害への支援の輪の広がり等が挙げられていた。私もこの九か月間、卒業後も続く安積の絆、「安積・あさか・A S A K A」という大きくて強い輪の存在に改めて気づかされてきた。

一例を挙げると、本校同窓会である「安積桑野会」の各支部が全国各地に組織されていること。母校の校長就任一年目ということもあり、都合がつく限り極力出席するよう努めた。ほとんどが六月・七月に集中するのだが、五月から十月にかけての土曜日の午後、仙台、宇都宮、関西（今年は京都開催）、福島県庁、二本松、郡山市役所、須賀川、石川の各支部総会にお邪魔した。この他にも、青森、盛岡、東京、福島（県庁桑野会とは別）、本宮、安積町、湖南、猪苗代、三春、矢吹、いわき、白河、香港・華南の支部がある。他校でも県内を中心に同窓会組織はあるのだが、あまり活動していないのが現状。一方安積桑野会は、総会の開催だけでなく、今年発足した「関西桑野会学生会」のように、現役の大学生を支援したり交流・親睦を図る組織があるなど活動が盛んであり、しかも母校安積への熱い思いを持った先輩方がたくさんいるのだ。来年度の百三十周年記念行事に向けて、大きな安積の輪の存在を今後ますます意識することになると思う。

ところで「輪」というと「絆、結びつき」というイメージを喚起すると同時に、「巡り来る、循環する」というイメージを持つと思う。この原稿を書いているのが、偶々冬至に当たる十二月二十二日前後頃だったのだが、「冬至かぼちゃ」や「ゆず湯」のことを考えたりしながら、日本の四季の巡りの不思議さ、絶妙さについて改めて考えさせられたのでそのことを書いてみたい。日本の四季の巡りについては古来、多くの文章が書かれているが、おそらく生徒諸君は既に学習したであろう「徒然草」の有名な一節を引用する。

（「徒然草」第百五十五段 世に従はん人は）（本文は、岩波文庫『新訂徒然草』（西尾実・安良岡康作校注）による）

春暮れて後、夏になり、夏果てて、秋の来るにはあらず。春はやがて夏の氣を催し、夏より既に秋は通ひ、

秋は即ち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり、梅も蕾みぬ。木の葉の落つるも、先づ落ちて芽ぐむには

あらず、下より萌しつはるに堪へずして落つるなり。

この段は、死が不意に訪れることを特に強調して、ある季節は、既に次の季節を含んで持っていること、葉が落ちる前から、既に次の芽が用意されていることを述べ、自然現象に見られる変化の相が人間の生にも見られ、移り行く生の中に常に死が兆していて、それが思いがけなく突然やってくる人生の無常を説いており、だから、必ず成し遂げようと思うことは直ちに実行すべきである、というのが一般的な解釈である。

高校生になつてこの段を読み、夏の灼熱の中に秋の虫の幽かな声を聞き取るようになったり、落葉のメカニズムの不思議さを感じた人も多いだろう。また、「つはる」は兆しはじめた徴候が進むことを表し、妊娠初期の身体の変調「悪阻」が、この名詞形であることを知った人もいるだろう。私もその一人なのだが、ここでは季節が次の季節を内包していることと、それが繰り返す巡ることに

ついて、少し視点を変えて書こうと思う。

先ほど「冬至かぼちゃ」と書いたが、**冬至（*1）**は「日短きこと きわま 至る」という意味で、太陽が出ている時間が一年で最も短い日であり、夜の時間が一年で最も長いということになる。そのため、昔の人々は「生命の終わる時期、死に一番近い日」だと考えていたようで、現在でも、その厄を払うためにかぼちゃやお汁粉を食べたり、ゆず湯に入るなどして体を温めることで、栄養をとり無病息災を願う風習が続いているのだ。

最も夜が長い冬至以降、寒さは厳しさを増して雪も降り積もり、と同時に昼の時間は日々長くなっていくという現象をどう捉えるか。これは、季節が次の季節を内包していることを示すのだが、見方を変えれば人間にとってマイナスの要素だけが重なっていくのではなく、マイナスとプラスが重なっていく、とも取れるだろう。

最も昼が長い夏至も同じで、平成二十五年は六月二十一日だったが、これ以降、暑さは厳しくなる一方、暑さを凌ぎやすい夜は長くなっていく。昼夜の長さは、地球の地軸の傾きや地球と太陽の自転・公転等で決まる**宇宙物理学（*2）的現象**で、人間の感傷とは無関係だろう。しかし、日本人の私は、四季の移ろいに意味を感じると言うか、造物主の配慮のようなものを感じることがある。マイナスの要素だけが重なっていけば人間はそれに押しつぶされてしまうが、マイナス・逆境の中にも微かではあるが明るい光が見えるから人間は頑張れるのだ。

安積で学ぶことも、他からは羨ましく思われても、実際にその環境の中にいるとなかなか大変であることは、生徒諸君もよく知っているだろう。君たちは高校在学中も卒業後も、様々な試験に晒されるはずであるが、つらい思いをしている時こそ周りのプラス要素に目を向けて、プラスの要素はこれから大きくなっていくのだと信じて、乗り切ってほしい。

もう一つ、季節が繰り返し巡ってくることについて、日本のある哲学者は、時間には縦軸と横軸の時間があると言う。縦軸の時間は、直線的に進んでいく、もしくは発展していく時間で、逆方向には決して戻らない。横軸の時間は円環の回転運動をしており、バネをイメージすればよいが螺旋状に縦軸の時間の進む方向に少しずつ進んでいく。横軸の時間は季節と共に円環運動を繰り返し、去年と同じ（ように見える）春が巡ってくれば、人々は、帰帰してきた春と共に一年前と同じ世界に帰帰する。今年の春は、今までの春と全く同じであるわけではないのだが、他国よりも明確な四季を持つ日本では、また巡って来た春の中で、一年という時の流れと、生きながらえることができた喜び（感謝の気持ち）を感じるのかもしれない。

季節の移ろいがそうであるように、人間にとってマイナスとプラスは必ず重なって現れるという認識を持って、貴重な時間を大切に使いつつ、巡り来る季節がもたらす恵みに感謝をして生きていく、それが人の「年輪」を重ねていくということなのかも知れない。

冬至（*1）：本校の理科（地学）担当の菅家奈未教諭に聞いた方が、わかりやすく説明してくれると思うのだが……。

十二月二十二日頃、北半球では太陽の南中高度が最も低く、一年の間で昼が最も短く夜が最も長くなる日のこと。ちなみに、冬至の日には北緯 66・6 度以北の北極圏全域で極夜となり、南緯 66・6 度以南の南極圏全域で白夜となる。

宇宙物理学（*2）的現象：一九二一年、京都帝国大学では新しい *astrophysics* を講義するということで、**新城新造（安積第二期**

生で後に第八代京大総長）の提案でその訳語から「宇宙物理学教室」が設立され、そのため、現在でも京都大学出身の天文学者は肩書きとして「宇宙物理学者」を使用しているという。ただし、*astrophysics* は、現在では一般的に「天体物理学」と訳されているようである。